

ハイデッガーにおける真理概念

戸田 洋樹*

Von den Wahrheitsbegriffen in Heidegger

Hiroki TODA*

0. はじめに

ハイデッガーが「真理」の問題について論じている著作は、1927年公刊の『存在と時間』、1943年初版とされる『真理の本質について』、1942年に雑誌論文として掲載され、『ヒューマニズムに関する書簡』とともに1947年に単行本として公刊された『プラトンの真理論』であるが、表題にはなっていないが、『ヒューマニズムに関する書簡』でも「真理」に関わる問題について語られている。ただ、ハイデッガーが「真理」の問題について特に表立って集中的にとりあげた時期というのは、1930年代の始めから終わりにかけてであることが、彼の講義集から窺い知ることができる。『真理の本質について』も『プラトンの真理論』も1930年代前半の彼の講義に基づくものであり、また、1937年から38年にかけての冬学期の講義、すなわち、「哲学の根本的問い—〔論理学〕の精選〔諸問題〕—」と題された講義は、実質的には、「真理」の問題を中心として行われているからである。

周知のように、ハイデッガーは、これらいずれの論考においても、「真理」という言葉の意味をギリシア語の「アレーテイア」(ἀλήθεια)に結びつけて捉えるのであるが、しかし、『存

在と時間』の真理概念と1930年代のそれとは、かなり異なっており、また、1930年代の論考の過程のなかにも、違いが見られる。ハイデッガーを弁護すれば、『存在と時間』と1930年代のものが異なっているのは、当然のことであると言えるかもしれない。『存在と時間』の主題は、未完であるとはいえ、「存在一般の意味の解明」のための「実存論的分析論」であり、『存在と時間』における真理論は、その途上である「現存在」の「予備的基礎分析」の過程のなかで展開されたものに他ならず、「真理の本質」をそれ自身として論考しようとした1930年代の真理論と同一でないことは、明らかであるように思われるからである。

だが、もしそうであるにしても、両者の違いを考えることはそれ自身として意味のあることであり、また、仮に、両者の異質性がハイデッガー哲学そのものの変質と結びついているとすれば、これはこれで、ハイデッガー哲学を語る上で意味があるといつてよいであろう。本稿は、『存在と時間』における真理概念と『真理の本質について』で提示される真理概念とを比較・検討し、「哲学の根本的問い」講義と『ヒューマニズムに関する書簡』についても言及するこ

*人間健康学部 健康栄養学科

とで、ハイデッガーにおける真理概念の変容過程を明らかにすることを目的としている。

1. 『存在と時間』における真理概念

1-0

ハイデッガーが『存在と時間』において「真理」の問題をとりあげているのは、第1部第1編第6章「現存在の存在としての気遣い」(Die Sorge als Sein des Daseins)の終わりに位置する「現存在、開示性、真理」(Dasein, Erschlossenheit, Wahrheit)という表題の付された第44節においてである。この第44節でハイデッガーは、a) 伝統的真理概念とその存在論的諸基礎、b) 真理の根源的現象と伝統的真理概念の由来、c) 真理の在り方と真理の前提という三項目に分けて「真理」について論じるのであるが、ここでは、まず、ハイデッガーが『存在と時間』において「真理」というものをどのように捉えているかを、ハイデッガーの主張に即して、見ていくことにする。

1-1

ハイデッガーによれば、「真理の在り処」は「言表」(die Aussage)あるいは「判断」(das Urteil)にあり、「真理の本質」は「言表」あるいは「判断」が、「言表の対象」あるいは「判断の対象」と「合致」(Übereinstimmung)するところにあるというのが、「伝統的真理概念」であり、それはアリストテレスに由来する。「知性と物との適合」(adaequatio intellectus et rei)という中世の支配的な真理概念や「認識とその対象との合致」、「判断作用と判断内容との合致」、「判断内容と現実にある物との合致」などといった近代の真理概念も、基本的には、アリストテレスのものを受け継いでいる、とハイデッガーは言う⁽¹⁾。

しかし、ハイデッガーによれば、このような

「合致」とか「適合」という真理概念では、「真理の本質」を言い当てられない。例えば、⁽²⁾誰かが、壁を背にして、「壁にかかっている絵は傾いている」と言表したとして、その「言表の内容」(言表されたこと)が真であるとする。この場合、「言表の内容」が真であるのは、「壁にかかっている傾いた絵」に「合致」しているからであろうか。「言表の内容」が真であると確認されるのは、「言表した人が振り返って傾いている壁の絵を知覚する」ことによってであるが、そのとき、その人の「言表の内容」が「壁の傾いている絵」という「現実にある事物」に「合致」しているからであろうか。そうではない。「言表の内容」は、いわば「心理的な出来事」であり、この「心理的な出来事」が「現実にある事物」としての「壁の傾いた絵」と合致することはないからである。では一体、言表した人が、振り返って、壁にかかっている傾いた絵を知覚することで確認されているものは何か。それは、現実には「壁にかかっている傾いている絵」それ自身である。すなわち、「言表において思念されていた存在者それ自身」⁽³⁾である。「言表することは、存在する事物それ自身に関わって存在すること (Das Aussagen ist ein Sein zum seienden Ding selbst)」⁽⁴⁾であり、その「言表が真であるとは、それが、存在者 (das Seiende) をそれ自身に即して (an ihm selbst) 暴露する (entdecken) ということの意味する」⁽⁵⁾。そして、その際、「言表は、存在者の暴露性 (das Seiende in seiner Entdecktheit) を見させているのである」⁽⁶⁾。

このように、「言表」あるいは「言表の内容」が真であるということは、それが現実の「存在者」と合致するというのではなくて、言表する人が「存在者それ自身」を「暴露する」ということであり、それによって、「存在者」の方は「暴露性」において見させられる、というこ

となのである。

だが、「真理」を「暴露すること」および「暴露されてあること」として捉えることは、きわめて「恣意的」なのではないだろうか。そうではない。ギリシア語で「真理」を意味する「アレテイア」とは、本来、「存在者の暴露性の仕方」(das Seiende im Wie seiner Entdecktheit)、すなわち、「存在者」の「非隠蔽性」(Unverborgenheit) のことであり、その意味で、「真理」というものを、「存在者」を「暴露すること」、あるいは「存在者」が「暴露されてあること」として捉えることには、十分な根拠があるのである。

ところで、「言表する人」とは、『存在と時間』の文脈からして、これまでの「現存在」の「予備的基礎分析」の主題となってきた「現存在」(Dasein) としての人である。したがって、「暴露しつつあることとしての真であること」(das Wahrsein als Entdeckend-sein) は、「現存在」の「一つの存在様式」(eine Seinsweise)⁽⁷⁾ であるということができ、⁽⁷⁾ 「現存在の存在」というのは、すでに、「気遣い」(Sorge) として明示されていた。そうであれば、「暴露しつつあること」および「暴露されてあること」としての「真理」は、「気遣い」のうちに包蔵されているのでなければならない。しかし、「気遣い」とは、「世界内部的に出会う存在者もとの存在として、世界の内ですでに、みずから先立って存在する」という「世界—内—存在」(In-der-Welt-sein) としての「現存在の存在」のことである。それゆえ、ハイデッガーによれば、「暴露すること」というのは、「現存在」がみずからの出会う「世界内部的存在者」(innerweltliches Seiende) を「暴露すること」であり、それに対して、「世界内部的存在者」の方は、「現存在」によって「暴露されてあること」になるのである。ちなみに、ここでハイデッガーは、「暴

露しつつある」「現存在」が一次的に真であり、「暴露されてあること (Entdecktsein)」、「暴露性 Entdecktheit)」の方は二義的に真であるとしている⁽⁸⁾。

1-2

ところで、「現存在の存在」としての「気遣い」は、「世界内部的存在者のもとでの存在」、「世界の内にすでに在る」、「みずから先立って在る」という三つの契機からなるとされていた。「暴露しつつあること」としての「真理」が「世界内部的存在者」を「それ自身に即して」「暴露しつつあること」を意味する以上、この「真理」、すなわち「アレテイア」としての「真理」というのは、単に、「現存在の存在」の「世界内部的存在者のもとでの存在」という一契機に関わるにすぎない。その意味で、「暴露しつつあることとしての真であること」は、「現存在」の「一つの存在様式」である、とされているのである。それでは、『存在と時間』における「真理概念」は、これに尽きるのであるだろうか。そうではない。ハイデッガーはさらに論を展開しようとするのである。ここでも、ハイデッガーの主張に即して、その「真理論」を見ておこう。

ところで、ハイデッガーは、「世界内部的存在者の暴露性 (Entdecktheit des innerweltlichen Seienden) は、世界の開示性 (Erschlossenheit der Welt) に基づいている」ことがすでに示されていたとした上で、さらに、次のように主張する。すなわち、彼は、「開示性というのは、現存在がみずからの現 (Da) であるための、現存在の根本の在り方 (die Grundart des Daseins) のことであ」り⁽⁹⁾、この「現存在の開示性」に「世界内部的存在者の暴露性」が基づいているだけではなく、この「現存在の開示性」をもって、「真理の最も根源的な現象」(das ursprünglichste Phänomen der Wahrheit) に到達する

ことができる、そしてまた、「現存在が本質的にみずからの開示性を存在する限りにおいて、すなわち、現存在が、開示されているものとして、開示をし、暴露をする限りにおいて、現存在は本質的に真である」がゆえに、「現存在は真理のうちに (in der Wahrheit) ある」⁽¹⁰⁾、と主張するのである。

では、「現存在が真理のうちにある」というのはどのような意味であろうか。「現存在」が「現」を存在すること、すなわち「現存在の開示性」は、「現存在が真理のうちにある」こととどのように関わっているのだろうか。ハイデッガーは、「暴露すること」としての「真理」の概念を、「気遣い」を構成する契機の一つに関連づけて説明したのと同様に、いわば「開示性一般」と「気遣い」の「全体」との関連のなかで「現存在が真理のうちにある」という「命題」の意味を、四つに区分して説明しようとするのである。ハイデッガーの説明をそのまま見てみよう。

第一に、「現存在の存在機構」には「開示性一般」(Erschlossenheit überhaupt) が属し、それが、「気遣いという現象」によって明示された「現存在」の「存在構造全体」を包括しているが、この「気遣い」には、上述のように、「世界内部的存在者のもとでの存在」(Sein bei innerweltlichem Seienden) というものが属している。したがって、「現存在の存在」とその「開示性の存在」とともに「世界内部的存在者の暴露性(Entdecktheit)」が存在する⁽¹¹⁾。第二に、「現存在の開示性の構成要素」として、「現存在」には「被投性」(Geworfenheit) が属しているが、これによって、「現存在」は「そのつどすでに私のものとこのものとして、特定の世界の内に、また特定の世界内部的存在者の特定の圏域のもとで存在している」⁽¹²⁾ ということが露呈する。第三に、「現存在の存在機構」に「企投」

(Entwurf) というものが属しているが、これは、「現存在」が「みずからの存在可能(Seinkönnen)に開示しつつ関わる存在」のことを意味する。「現存在」は、日常的・平均的には、「みずからの存在可能」を「世界」や「他者」のほうから了解しているが、もし、「みずからの最も固有の存在可能」からみずからを了解する場合には、すなわち、「現存在」が、「最も根源的で、最も本来的な開示性」のなかで、「みずからの存在可能」として存在することができる場合には、そのような「開示性」は「実存の真理」(Wahrheit der Existenz)⁽¹³⁾ であることになる。

ハイデッガーは、このようにして、「現存在の存在機構」に属する「開示性」から「現存在が真理のうちにある」ということ、さらには、「実存の真理」というものを説明するわけであるが、しかし、「現存在の存在機構」には、第四に、「頽落」(das Verfallen) というものが属しているとされていた。この「現存在の存在機構」に属しているはずの「頽落」は、「開示性」としての「真理」にどのように関わっているのだろうか。ハイデッガーは言う。「現存在は、まずさしあたりたいてい、みずからの世界に埋没している」が、そのような「頽落」にあっては、「暴露されたものや開示されたものが、空談や好奇心や曖昧さにより、偽装性(Verstelltheit)や閉鎖性(Verschlossenheit)の様態にある」。その意味で、「現存在は、本質的に頽落しているがゆえに、その存在機構からして非真理(Unwahrheit)のうちにある」⁽¹⁴⁾、と。

結局のところ、ハイデッガーは、『存在と時間』の課題設定の一つ、すなわち、「現存在」の「予備的基礎分析」と関連づけて、次のように述べることになる。①「世界—内—存在が真理と非真理とによって規定されているということの実存論的—存在論的解釈は、われわれが被投の企投(der geworfene Entwurf)として示した現

存在の存在機構のうちにある」、また、「最も根源的な意味での真理とは、現存在の開示性のことであり、世界内部的存在者の被暴露性というのは、その開示性に属している」。②「現存在は、等根源的に、真理と非真理のうちにある」⁽¹⁵⁾、と。

このように、ハイデッガーは、「現存在」(Dasein)の「現」(Da)の、いわば内実である「開示性」(Erschlossenheit)を「真理」と結びつて、みずからの「真理論」を展開していくわけであるが、『存在と時間』の真理概念について結論的に言えば、「真理」というのは「現存在の存在」、特に、その「開示性」において捉えられている、とすることができる。「真理が存在する(es gibt Wahrheit)のは、現存在が存在する限り(sofar)においてのみ、また、現存在が存在するあいだ(solange)においてのみである」⁽¹⁶⁾、「すべての真理は、それらが本質的に現存在にふさわしい存在の仕方をして以上、現存在の存在と相関的に存在する」⁽¹⁷⁾、とハイデッガーが述べているのは、その意味においてである。

2 『真理の本質について』における真理論

2-0

本書でハイデッガーは、「事物とその事物についてあらかじめ思念されたものとの一致」(Einstimmigkeit einer Sache mit dem über sie Vorgemeinten)と「言表において思念されたものと事物との合致」(Übereinstimmung des in der Aussage Gemeinten mit der Sache)というものが、「通常の真理概念」であり、それは、「事物と知性との適合」(adaequatio rei et intellectus)を「真理」(veritas)とする「伝統的な真理概念」に由来するとして、その二つの意味を説明し、結局は、いずれもが、「……にみずからを向けること」(ein Sichrichten nach ……)こととしての「正しさ」(Richtigkeit)を真理として

いると主張し⁽¹⁸⁾、『存在と時間』の場合と同じように、「言表において思念されたものと事物との合致」という真理概念を検討することから、みずからの真理論を展開する。

2-1

例えば、目の前に5マルク貨幣があるのを見て、「その貨幣は円い」と「言表する」として、このとき、その「言表」においてどのような事態が生じているのだろうか。ハイデッガーによれば、それは、「貨幣についての言表が、貨幣を前に一おき(vor-stellen)、その前に一おかれたもの(das Vor-gestellte)について、そのつどの主導的な観点において(空間的観点で……引用者……)、前に置かれたもの自身がどのような状態にあるか(円である……引用者……)を、述べる」ことによって、「貨幣という事物にみずからを関係させる」という事態である⁽¹⁹⁾。「前に一おくこと」(表象すること)とは、「事物を対象として対立させる(das Entgegenstehenlassen)こと」を意味し、その際、「対立するもの」(das Entgegenstehende)は、「前におかれたもの」として「一つの開けた対立」(ein offnes Entgegen)という場を「横断しつつ」も、同時に、それ自身事物として「立ち留まり」、「そのままあるもの」(ein Ständiges)としてみずから示している⁽²⁰⁾、ことになる。そして、「この、事物が一つの対立という場を横断するなかで現象すること」(dieses Erscheinen des Dinges im Durchmessen eines Entgegen)が行われるのは、「一つの開けた場の内部に」(innerhalb eines Offenen)においてであり、この「開けた場」の「開け」(die Offenheit)によって、「表象」はそのつど単に「一つの関係領域」(ein Bezugsbereich)として引き入れられ、引き受けられるのである⁽²¹⁾。

ところで、「表象しつつ言表する」ことは、「事

物」に対する「関係」(die Beziehung)であるが、それはまた、「関係」として「一つの態度」(ein Verhalten)である。しかし、「すべての態度は、開けた場に立ちつつ、そのつど一つの開かれうるものそのもの (ein Offenbares als ein solches) に関わる、という特徴をもっている」⁽²²⁾。この「開かれうるもの」とは、「存在者」(das Seiende) であって、「表象しつつ言表する」ことも、「存在者」へと「開いて立つ」(offenständig) 「一つの態度」に他ならないが、ハイデッガーは、この「表象しつつ言表する」「存在者」への「一つの」「開いて立つ」態度のなかに、「正しさ」(Richtigkeit) としての「真理」というものが位置づけられるとする⁽²³⁾。ハイデッガーによれば、この「表象しつつ言表する」態度において、「存在者」それ自身が「表象的」となり、その結果、「表象しつつ言表する」ことが、「存在者を、それがそうであるように述べよ (das Seiende so-wie es ist zu sagen)、という指示 (eine Weisung) に服し」、「言表がその指示に従って」、「みずからを存在者に指し向ける」、そして、「そのようにみずからを指し向けて述べる (das dergestalt sich anweisende Sagen) ことが、正しい (richtig)」という意味での、「真」(wahr) ということなのである⁽²⁴⁾。

このように、「存在者」へと「開いて立つ態度」のなかで、「みずからを存在者に指し向け」、「存在者がそうであるように」述べよという「指示」(Weisung) に従うことが、「言表」の「正しさ」としての「真理」であることになるが、しかし、ハイデッガーは、「言表」の「正しさ」としての「真理」というのは、いまだ、「真理の本質」を言い当てているものではない、とする。ハイデッガーによれば、「真理の本質」を明らかにするためには、さらに「正しさを可能にする根拠」を追究しなければならないのである。

「表象しつつ言表する」「態度」の「正しさ」

とは、「存在者」へと「開いて立つ態度」において、みずからを「開かれうるもの」としての「存在者」に「指し向け」、「存在者がそうであるようにと述べよ」という「指示」に従い、それに「同調する」(stimmen)⁽²⁵⁾ ことであるが、しかし、このような「言表」に「正しさ」を与える「開いて立つ態度」のうちには、「開かれうるもの」としての「存在者」の方に、「表象すること」の「正しさの標準」(Richtmass) あるいは「正しさの規準」(die Richte) がある、ということを前提している。したがって、「開いて立つ態度」は、「すべての表象することに対して、正しさの標準を予め与えること (Vorgabe) ことを引き受けなければならない」⁽²⁶⁾ が、この「正しさの標準(あるいは規準) 予め与えること」について、ハイデッガーは、次のように言う。「正しさの規準を予め与えること (Vorgeben) が、一つの「開けた場」のなかに、「開かれうるもの」のために、すでに「みずからを解放してしまっていて」(hat sich freigegeben)、「この開けた場に基づいて支配する開かれうるもの」が、「あらゆる表象する働き (jegliches Vorstellen) を拘束する」ということに他ならない⁽²⁷⁾。そして、「拘束する正しさの規準のためにみずからを解放することは、一つの開けた場の開かれうるものに向かって自由であること (Freisein zum Offenbaren eines Offenens) こととしてのみ可能である」⁽²⁸⁾、と。

こうして、ハイデッガーによれば、「正しさを内的に可能にするものとしての態度の開き立つことは、自由 (die Freiheit) に基づき、したがって、「言表の正しさとして解された真理の本質は、自由 (Freiheit) である」⁽²⁹⁾ ことになる。

しかし、「言表の正しさ」としての「真理」の本質が「自由」にあり、「自由」が「正しさ」を内的に可能にする根拠であるとしても、この

「自由」というのは、例えば、「強制的ない行動」(ein ungezwungenes Handeln) とか「人間の気ままさ」(das Belieben des Menschen) とかいったものことではない。「自由」というものをそういった「人間の主観性」と結びつけて捉えるのは、「自由は人間の一つの特性」(eine Eigenschaft des Menschen) である、という先入見からきている。もちろん、「言表の正しさ」の「内的根拠」としての「自由」は、「人間」の在り方と無関係ではない。しかし、「人間」の在り方と結びついているとしても、それは、「現存在」(Dasein) としての人間との関わりのなかで、より根源的な意味において捉えられなければならないのである。それでは、そのような、より根源的な意味での「自由の本質」はどこにあるのだろうか。

「自由」は、上述のように、「開けた場の開かれうるものに対する自由」として規定された。「開かれうるもの」とは、「開いて立つ態度においてそのつど開かれる存在者」のことであった。したがって、「開けた場の開かれうるものへの自由」は、「そのつどの存在者」を、「それがそれである存在者で在らしめる (lassen das Seiende sein, das es ist)」⁽³⁰⁾ ことになる。しかし、この「存在一せしめる」(das Sein-lassen) というのは、「そのままにしておく」というのではなく、「存在者にみずからを関わり入れる」(das Sicheinlassen) ということであり、「開けた場と、それぞれの存在者が立ち入る開けた場の開け (die Offenheit) へと、みずからを関わり入れる」⁽³¹⁾ ということである。ここでハイデggerは、「開けた場」というのは、西洋の思索の初期において、「隠蔽されていないもの」(das Unverborgene) という意味での「アレーテア」(ἀλήθεια) とされていたが、その意味からして、「アレーテイア」(ἀληθεια) を、字義通りに、「非隠蔽性」(Unverborgenheit) とし、

「開け」という事態を的確に示すために、「真理」(Wahrheit) という言葉ではなく、「非隠蔽性」あるいは「露現性」(Entborgenheit) という言葉を使う、と言う。

では、「存在者を存在一せしめ」、「存在者にみずからを関わり入れる」「自由」には、さらに、どのような意味があるのだろうか。ハイデggerによれば、「みずからを存在者に関わり入れること」、すなわち「存在者の露現性へとみずからを関わり入れること」は、「存在者を存在一せしめることとして、みずからを存在者そのものに (das Seiende als eines solches 曝し出す) ことであり、したがって、「存在一せしめること」としての「自由」は、それ自身、「曝し一出すこと (aus-setzend)、脱自的に一存在する (ek-sistent) こと」⁽³²⁾ に他ならない。結局のところ、「自由」は、「存在者そのものの露現へと関わり入れられること」(die Eingelassenheit in die Entbergung des Seienden als eines solchen) であり、他方、「存在者」の「露現性」の方は、「開けた場の開け (die Offenheit des Offenen)、すなわち現 (das Da) を、当のもので在らしめる脱自的に一存在する自己一関わり入れ (das ek-sistente Sich-einlassen) のうちに保蔵される」⁽³³⁾、ことになる。

2-2

ところで、この「自由としての真理に根づいた脱自一存在 (Ek-sistenz) は、存在者そのものの露現性のうちに曝し一出すことである」のだが、「歴史的人間の脱自一存在」が始まったのは、「最初の思索者」(der erste Denker) が、「存在者とは何であるか」という問いをもって、存在者の「非隠蔽性」に問いつつ立ち向かった瞬間においてである、とハイデggerは言う。すなわち、ハイデggerによれば、そのとき、「存在者の全体」(das Seiende im Ganzen) は、「自

然」(φύσις)とされるが、「存在者それ自身のことさらその非隠蔽性へと高められて保蔵され、その保蔵が存在者そのものへの問いに基づいて把握される場合に初めて、歴史は始まる」のである。「存在者の全体の原初的な露現」と、「存在者そのものへの問い」と「西洋の歴史の発端」とは同じものであり、一つの「時間」のうちで「同時的」なのである⁽³⁴⁾。

このように、「真理の本質」としての「自由」は、「存在者を脱自的に、露現的に存在せしめる」ことであり、「開いて一立つ態度」はすべて、この「存在者を存在せしめることのなかで振り動き、そのつど、あれこれの存在者に向かって態度をとる」わけであるが、しかし、ハイデggerによれば、この「個々の態度において存在者を存在せしめること」が、他方で、「存在者の全体」を「隠蔽する」(verbergen)ことに他ならない⁽³⁵⁾。ハイデggerは言う。「個々の態度のなかで存在者を存在せしめることは」、「存在者へと関わって、存在者を露現する」のだが、「存在者を存在せしめることによって存在者の全体を隠蔽する」、と。すなわち、「存在せしめることはそれ自身において、同時に、一つの隠蔽すること(ein Verbergen)であり」、「現一存在の脱自的に一存在する自由のなかで、存在者の全体の隠蔽(die Verbergung)が性起し、隠蔽性が存在する」⁽³⁶⁾のである。

この「存在者全体の隠蔽性」は、「真理の本質にとって最も固有で本来的な非一真理(die eigenste und eigentliche Un-wahrheit)」であるが、それは、「あれこれの存在者とそのつど開かれてあること(jede Offenbarkeit von diesem und jenem Seienden)よりも、また「存在せしめること」、すなわち「露現しつつもすでに隠蔽されたままにとどまり、隠蔽することへと態度をとっている存在せしめること」よりも一層古く、これらに先立っている。

この「存在せしめること」が「隠蔽することへの関わり」のなかで保蔵するもの、それは、「隠蔽されるものの全体(das Verborgene im Ganzen)の、すなわち存在者そのものの隠蔽されること」、言い換えれば、「秘密」(das Geheimnis)に他ならない⁽³⁷⁾。

こうして、「存在者を存在せしめること」に先立って、「秘密」が「存在者を存在せしめる」「人間の現一存在」を支配し、「現一存在は、それが脱自的に一存在する限り、最初の、しかも最広の非一露現性(Un-entborgenheit)を、すなわち本来的な非一真理(Un-wahrheit)を保蔵」⁽³⁸⁾していることになる。「秘密」とは、「本来的な非一真理」として、「真理の本来的な非一本質(Un-wesen)」なのであるが、「非一本質」といっても、ここで言われている「非一本質」とは、「本質に先立って一現成する本質」(das vor-wesende Wesen)のことを意味する。そしてまた、「非一真理としての真理の原初的な非一本質」というときの「非(Un)」は、存在の真理(die Wahrheit des Seins)といういまだ経験されていない領域のうちへと示唆している⁽³⁹⁾のである。

さて、「自由」とは、「存在者を存在せしめること」として、「開発され(entschlossen)」、「みずから閉ざさない関係」であり、「すべての態度」は、この関係に基づき、この関係から存在者とその露現の指示を受けとるのだが、その際、「隠蔽への関係」は、「秘密の忘却」(eine Vergessenheit des Geheimnisses)に優位を許し、その「忘却」のうちに消失することによって、みずから自身を隠蔽する⁽⁴⁰⁾。その結果として、第一に、「人間」の「存在者」に対してとる「態度は、「あれこれの存在者」や、それらが「そのつど開かれている状態」に甘んじたり、「通用するもの」や「使いこなせるもの」に固執したり、「通りのよい意図や要求の範囲

から「行動や活動」のための「指示」を得ようとしたりする⁽⁴¹⁾。第二に、「秘密は、忘却のなかで、また忘却のために、みずからを拒むことによって、歴史的人間を、彼に通用しているものにおいて、彼の造ったもののもとに、とどめたままにしておく」⁽⁴²⁾。それによって、「人類」は自分の「世界」を、そのつどの「最新の欲求や意図」に基づいて補完し、自分の「企画や計画」なるもので満たすが、そのような事態になっていることの「本質」を顧慮することを知らない。「人間は、存在者の全体を忘却しつつ」、「最新の欲求や意図」、「自分の企画や計画」といったものに「尺度」を取り、結局は、「主観」としての自分自身を尺度とすることになるが、「もっぱら主観としての自分自身のみをすべての存在者に対して尺度とすればするほど、尺度を測り誤る」。このような「誤測された忘却」によって、「人類」は「そのつど近づきうる通用しているもの」によって「自分自身を確保すること」に「固執する」(beharren)⁽⁴³⁾。

こうして「現存在は、脱自的に一存在するのみならず、同時に、執自的に存在する (insistieren)」ことになる。そして、ハイデッガーは、次のように言う。このような「執自的に存在する実存においても、秘密は支配するが、しかし、それは、真理の忘却されて、非本質的となった本質として支配する」⁽⁴⁴⁾。と。ハイデッガーによれば、「執自的に実存するものとして、人間はそのつど最も手近な通用性に向けられ」、「秘密から身をそむける」が、そのような「通用するものへの執自的な転向 (die Zuwendung)」と「秘密からの脱自的に一存在する転向 (die Wegwendung)」とは共属し合っていて、「一つの同じもの」である⁽⁴⁵⁾。「人間が秘密から通用するものへ、続いて、通用するものから、さらに最も手近な通用するものへと、しかも、秘密のわきを通り過ぎて追い回されていることが、迷うこと (das

Irrren)」である⁽⁴⁶⁾。「人間は、脱自的に一存在しつつ、執自的に一存在し、そうしてすでに迷いのうちに立っている」、だからこそ、「人間は常に迷う」のであり、その意味で「迷い (die Irre)」は「現一存在の内的な機制に属している」⁽⁴⁷⁾。そもそも「隠蔽された存在者の全体の隠蔽が、そのつどの存在者の露現のうちで支配していて、そのつどの存在者の露現が、隠蔽の忘却として、迷いとなる」のである⁽⁴⁸⁾。

3 『存在と時間』と『真理の本質について』、そしてその後

3-0

『存在と時間』と『真理の本質について』(……以下、この二つの著作の書名を同時に示す場合には、「両著作」と表現する—(筆者)—……)のいずれにおいても、ハイデッガーは、「言表ないし判断と事物との合致」というものを「伝統的な真理概念」あるいは「通常真理概念」として、アリストテレスの時代から中世を経て近代にまで受け継がれてきた「真理概念」の吟味・検討から出発している。この場合、「合致」というのが、「言表」あるいは「判断」と「事物」との間のことなのか、それとも、「言表の内容」と「事物」との間のことなのかについては、無頓着であるように思われるが、いずれにしても、ハイデッガーは、それらは「真理の本質」を言い当ててはいないとし、「真理の本質」というものは、「アレーティア」というギリシア語のものと意味、すなわち、「存在者」の「非隠蔽性」(Unverborgenheit)ということから捉えなければならぬとする。この限りにおいて、「両著作」に違いは見られない。しかし、「両著作」において実際に展開されている内容は、非常に異なっている。それだけではない。ハイデッガーが、その後に「真理の問題」を取り上げた「哲学の根本的問い」

講義、及び、「真理の問題」に間接的に関わる『ヒューマニズムに関する書簡』では、さらに、「両著作」におけるものとは異なった「真理概念」が語られている。われわれとしては、この問題について検討しなければならない。

3-1

3-1-1 さて、『存在と時間』における「真理論」の論点をまとめると、三つに区分することができる。第一は、「真理」というのは、「現存在」による「存在者の暴露性」であって、「存在者を暴露すること」は、「現存在の開示性」に基づき、その意味で、「現存在は真理のうちにある」、という論点である。整理すると、(1)「現存在」が「世界内部的存在者」を「暴露する」がゆえに、「世界内部的存在者」の「暴露されていること」が、「言表」における「真理」である。(2)「世界内部的存在者の暴露されていること（暴露性）は、世界の開示性に基づく」。(3)「開示性」というのは「現存在が現であるための根本の在り方」であり、「現存在」は「みずからの開示性を存在し、開示されたものとして、開示をし、暴露をする」。その限りにおいて、(4)「現存在は本質的に真であり」。その意味で、「現存在は真理のうちにある」、となる。

第二は、「現存在は真理のうちにある」ということから、「真理の最も根源的な現象」としての「開示性」を、「予備的基礎分析」によって明らかにされた「気遣い」としての「現存在の存在」に関連づけるという論点である。整理すると、(1) 第一の論点の(1)、(2)、(3)を、「世界内部的存在者のもとでの存在」という「気遣い」の一契機のうち位置づける。(2)「すでに存在する」という「気遣い」の一契機を、「被投性」として捉えなおす。(3)「みずから先立って存在する」という「気遣い」の一契機を、「現存在」の「存在可能」、すなわち「企

投」として捉えなおし、これを(2)の「被投性」と結びつけて、「実存の真理」という言い方で「現存在の本来的全体的性」としての「先駆的決意性」(die vorlaufende Entschlossenheit)を予示する⁽⁴⁹⁾。(4)「現存在は真理のうちにある」ということを明らかにするための(1)、(2)、(3)とは異なり、「現存在は非真理のうちにある」ということを「頹落」としての「気遣い」に位置づける、となる。

第三は、「真理」というのは「現存在の開示性」においてのみ捉えられるがゆえに、「現存在が存在しない限り存在しない」し、また、「現存在が存在する間だけ存在する」、という論点である。

このように、『存在と時間』の真理論の論点は、三つに整理することができるのだが、「非真理」の問題についてはおくとして、これらの論点を整理してみると、三つの真理概念が語られていることがわかる。第一は、「存在者の暴露性(Entdecktheit)」、あるいは、「現存在の暴露すること(Entdecken)」としての真理、第二は、「開示性(Erschlossenheit)としての真理、第三は、「現存在」の「被投的企投」、特に「企投」と関連する「実存(Existenz)の真理」である。しかも、ハイデッガー自身、第一を、いわゆる「アレーテイア」(非隠蔽性)としての真理、第二を「最も根源的な真理」、第三を「最も根源的で、最も本来的な開示性」⁽⁵⁰⁾としての真理と名づけているのである。その意味で、『存在と時間』においては、真理概念そのものが多義的なのであるが、それはなぜであろうか。

その理由として指摘しておかなければならないのは、本稿の冒頭でふれたように、『存在と時間』の真理論が、「存在一般の意味の解明」のための「現存在の実存的分析論」の途上に位置する「現存在の予備的基礎分析」の段階に位置づけられていることである。すなわち、ここ

では、いわゆる「アレーティア」（非隠蔽性）としての真理それ自身、すなわち「存在者の暴露性」あるいは「現存在の暴露すること」としての真理それ自身が主題ではなく、「アレーティア」としての真理を成立させている「現存在の開示性」が主題なのである。「開示性」というのは、「現—存在」の「現」の内実であるが、そもそも「現存在」が「実存論的分析論」に向かうための「予備的基礎分析」の対象とされたのは、「現存在」の「現」のうちに「存在了解」（Seinsverständnis）が隠れているとされたからであって、その「現」の、いわば内実が「開示性」に他ならないのである。その意味において、「開示性」というのは本来、「真理」というよりも「存在了解」のほうに密接に関連する「現存在」の在り方であると言わざるをえないのである。実際、ハイデッガーは、この真理論の終わりにあたって次のように述べている。「真理の存在は、現存在と根源的な連関のうちにある。しかも、現存在は、開示性、すなわち了解（Verstehen）⁽⁵¹⁾によって構成されているものとしてあるがゆえにのみ、そもそも存在というようなものが了解されるのであり、存在了解が可能なのである」⁽⁵²⁾、と。

ここに、『存在と時間』における真理論と、直接に「真理の本質」を問題とする『真理の本質について』との基本的な違いがあるのだが、それでは、『存在と時間』における「存在者の暴露性」としての真理と『真理の本質について』における「存在者の露現性」としての真理に関してはどうであろうか。そしてまた、「両著作」における「現存在」と「非真理」の関係についてはどのようになっているのだろうか。

3-1-2 まず、「存在者の暴露性（Entdecktheit）」としての真理と「存在者の露現性」（Entborgenheit）としての真理については、用語上の違いは別にして、「現存在」と「存在者」

との関係という点で、内容的に大きな変化が見られる。『存在と時間』で「存在者の暴露性」という場合、「存在者」は「現存在」によって「暴露される」のであり、その意味において、「現存在」の「暴露する」という側面が強調されている。「存在者」を「暴露すること」が「現存在の開示性」に基づくとされる以上、それも当然のことであるが、実際、上記のように、「暴露しつつ—ある」「現存在」が第一次的に真であり、「暴露されて—あること（暴露性）」は、二義的に真である、とハイデッガーは述べているのである。

このように、『存在と時間』では、「現存在」と「存在者」との関係は、「現存在」から「存在者」へ、という一方向的な関係とされているのだが、それでは、『真理の本質について』の「存在者の露現性」としての真理に関してはどうであろうか。「両著作」の真理論を比較するために必要な部分を抜き出すと、（1）「存在者の露現性」は、「現存在」の「開いて立つ態度」、すなわち、「一つの開けた場の開かれるものに対する自由」において成立するが、（2）その「自由」というのは、「開かれるもの」すなわち「存在者の露現性へと関わり入ること」であり、（3）この「自由の本質」は、「存在者を存在—せしめることとして、みずからを存在者そのものに曝しだす（aus-setzen）こと」、その意味で、「脱自的に—存在する」（ek-sistent）ことにあり、（4）このとき「現存在」は、「存在者そのものの露現へと関わり入れられていること」になる、という部分である。

この部分を見る限り、「現存在」が「開示性」において「存在者」を「暴露する」ことにより「存在者の暴露性」が成立するという、いわば一方向的な関係が語られているのではなく、より複雑な関係が語られていることがわかる。では、どのような関係であろうか

(1)の部分にある、「開いて立つ態度」と「自由であること」が同一の意味であること、さらに、「開けた場の開かれうるもの」というときの「開かれうるもの」(das Offenbare)が「存在者」を指していることは明らかであるが、「一つの開けた場」(ein Offenes)とは、何を指すのであろうか。それは、「みずからを存在者そのものに曝しだす」「存在者そのものの露現へと関わり入れられている」という表現から見て、「存在者そのものの露現」と結びついている、と言うことができる。すなわち、「開けた場」とは、「開いて立つ態度に」にとって、そのつど「開かれうる存在者」がそのつど「露現する場」であり、また、「開いて立つ態度」が「存在者」と関わる「場」のことである。このように考えると、『存在と時間』とは異なり、ここでは「現存在」と「存在者」、そして「存在者そのもの」の「開けた場」という三者の関係が語られていることになろう。すなわち、第一に、「存在者」が、「存在者そのもの」のそのつど「開けた場」のなかで「露現される」こと、第二に、「現存在」が、そのつど「露現される存在者」へとみずからをそのつど「関わり入れる」こと、第三に、「現存在」と「露現される存在者」とのそのつどの関わりは、「存在者そのもの」の「開けた場」のなかで行われること、要するに、「現存在」と「存在者」とは、「存在者そのもの」のそのつど「開けた場」のうちでそのつど関わる、という関係にあることになる。

3-1-3 「両著作」では、「真理」についてのみならず、「非真理」の問題もとりあげられている。「非真理」あるいは「非—真理」の問題についてはどのようになっていたのだろうか。『存在と時間』においては、「非真理」を「現存在の存在機構」の一つである「頽落」(das Verfallen)と関連づけて捉えられる。「頽落」というのは、「現存在」の「日常的な存在」、す

なわち、「みずからの世界に没入し」、「空談」(Gerede)や「好奇心」(Neugier)、そして「曖昧さ」(Zweideutigkeit)の、いわば支配下にある「現存在」の「存在」であるが、ハイデggerは、そのような「現存在」にあつては、「暴露されたものや開示されたものが偽装性や閉鎖性の様態にある」、「現存在は、本質的に頽落するがゆえに、その存在機構からして非真理のうちにある」⁽⁵³⁾、と言う。すなわち、ハイデggerによれば、いわば、「空談」、「好奇心」、「曖昧さ」のなかで生きる「頽落」した「現存在」が、みずからの「開示性」によって「暴露する」存在者を「偽装」し「閉鎖」するところに、「非真理」があり、その意味で、「現存在は非真理のうちにある」というのである。

ところが、ハイデggerは、「真理と非真理」を「現存在」の「被投的企投」(geworfener Entwurf)に関連づけて、次のように主張する。「世界—内—存在が真理と非真理によって規定されているということへの実存論的—存在論的条件は、われわれが被投的企投として特徴づける現存在の存在機構のうちにある」⁽⁵⁴⁾、と。「現存在の非真理」も、「実存の真理」に通じる「被投的企投」のうちにある、とハイデggerは主張するのである。これはどういうことであろうか。それはおそらく、上述の「実存の真理」としての「先駆的決意性」のうちに、「頽落」という「現存在の非真理」の克服という意味が含まれている、ということであろう。このような「非真理」の捉え方からみても、『存在と時間』の関心は、「現存在」の「実存論的分析論」のほうにあった、と言わざるをえないであろう。

『真理の本質について』においては、『存在と時間』とは異なり、「非真理」の概念は、より本質的なものとして捉えられている。いや、むしろ「非真理」の概念は、ある意味では、「真理」の概念よりも本質的なものとして捉えられる。

「現存在」の「開いて立つ態度」は、「開けた場」と「存在者の露現される」「開け」のうちへと「脱自的に」「みずからを関わり入れる」ことによって「存在者を存在せしめる」こと、そこに「真理」が成立するのだが、それは「そのつどの存在者」つまり「個々の存在者」が「露現される」そのつどの「開け」に「みずからを関わり入れる」にすぎない。すなわち、そこでは、「個々の存在者」が「露現する」だけで、「存在者の全体」は「露現されない」、つまり「隠蔽される」。この「存在者の全体の隠蔽性」が「非—真理」に他ならないのである。そして、ハイデッガーは、「存在者全体の隠蔽性」としての「非—真理」は、「あれこれの存在者にそのつど開かれてあること」としての「真理」よりも一層古く、「真理の本来的な非—本質」であり、「非—本質」であるといっても、「本質に先立って現成する本質」であるとし、この「存在者の全体の隠蔽」が「秘密」として「人間の現—存在」の歴史を支配する⁽⁵⁵⁾、と言うのである。

ハイデッガーによれば、「人間の現—存在」は、「歴史」の端緒においては「脱自—存在」において「露現した」はずの「存在者の全体」、それが「隠れている」という「秘密」を「忘却し」、「秘密」から「身をそむけ」て、「露現されてくる」「あれこれの存在者」に「執着する」。そこに人間の「迷い」が生まれ、「迷い」の支配が始まるのである。そして、この「迷い」について、結局は、次のように言われている。「隠蔽された存在者の全体の隠蔽が、そのつどの存在者の露現のうちで支配していて、そのつどの存在者の露現が、隠蔽の忘却として、迷いとなる」⁽⁵⁶⁾のである、と。

このように見ると、『存在と時間』における「非真理」の概念が、「現存在の気遣い」の「日常的」な「頹落」というあり方によるものに限定され、また「実存の真理」にとっては克服されるべき

ものという意味を持っているのに対して、『真理の本質について』では、「非—真理」というものは、かつて「露現した」はずの「存在者の全体の隠蔽性」として、「あれこれの存在者の露現性」としての「真理」と、いわば同根のもの、むしろ、「真理」より以上に根本的なものとみなされている。また、『存在と時間』では、「現存在」の「実存論的分析論」という枠組みのなかで「非真理」の問題が取り上げられているのに対して、『真理の本質について』では、人間の「世界歴史」(Weltgeschichte)の端緒という視点から、「非—真理」の問題が論じられている⁽⁵⁷⁾。ここにも「両著作」の違いが言えるであろう。

3-2

3-2-1 これまで見てきたように、『存在と時間』における真理概念と『真理の本質について』の真理概念とは、明らかな違いがあるのだが、では、『真理の本質について』以降の真理論はどのようになっていくのであろうか。ここで指摘しておかなければならないのは、内容上の違いにもかかわらず、「暴露性」であれ「露現性」であれ、「両著作」で問題となっているのは、「存在」(das Sein)ではなく、「存在者」(das Seiende)の「非隠蔽性」としての真理についてである。また、「両著作」でとりあげられている「非真理」についても、「偽装性」(閉鎖性)であれ、「隠蔽性」であれ、「存在者」に関する「非真理」のことである。確かに、『存在と時間』では、「存在は—存在者ではない—、真理がある限りにおいてのみ、存在する(es gibt)。そして、真理は、現存在がある限りにおいて、またその間においてのみ存在する。存在と真理とは等根源的に(gleichursprünglich)存在する」⁽⁵⁸⁾、と「存在」について語られている箇所はあるが、それ以上の説明はない。また、

『真理の本質について』では、「非—真理としての真理の原初的な非—本質」というときの「非は、存在の真理 (die Wahrheit des Seins) といういまだ経験されていない領域のうちへと示唆している」⁽⁵⁹⁾、と語られている箇所、また、「真理の本質は本質の真理である」⁽⁶⁰⁾ という、「存在の真理」を連想させる箇所はあるが、それ以上の展開はなされていない。

さて、1937年から38年にかけての「哲学の根本的問い」講義は、既述のように、内容的には、一つの真理論と見ることができるのだが、この講義で展開される真理論は、どのようなものだろうか。ここではその展開を逐一追跡することはできない。「両著作」と比較・検討するために必要な部分のみを記しておこう。

ハイデggerによれば、ギリシア人たちにとっても「真理の本質」は「存在者そのもの (das Seiende als solches) の非隠蔽性」あるいは「存在者の開け」 (die Offenheit des Seienden) であり、これが「正しさの可能性の根拠」となるが、しかし、彼らにとって「非隠蔽性」というのは、同時に「存在者それ自身の一規定」 (eine Bestimmung des Seienden selbst)、すなわち「存在者の存在者性」 (das Seiende in seiner Seiendheit) のことでもあり、そのために、彼らは「存在者それ自身とは何か」を問うことを、「哲学の問い」であるとしたのである。ところが、彼らは「存在者そのものの非隠蔽性」あるいは「存在者の開け」というのはどういうことなのかについては、問うことはしなかった。実は、彼らが不問にした、この「存在者そのものの非隠蔽性」あるいは「存在者の開け (die Offenheit)」こそが、「最も問うに値するもの」 (das Fragwürdigste) なのである⁽⁶¹⁾。それでは、「非隠蔽性」あるいは「開け」の「本質」、すなわち「真理の本質」はどこにあるのだろうか。

ハイデggerは言う。「初期ギリシアの思考」

にとって、「非隠蔽性は、現出すること (das aufgehende Hervortreten)、開けた場への現前 (die Anwesenung ins Offene) のことを意味し、「非隠蔽性」は「われわれが存在者を認識する限りにおいてはじめて、存在者に付け加わってくる」⁽⁶²⁾、と考えられていた。しかし、そうではなく逆である。「非隠蔽性のなかで、まず、存在者が存在者として、開いて現前するものとして、人間に向かって到来し、人間を非隠蔽性の開けた場のなかへおき入れる」⁽⁶³⁾ のである、と。すなわち、ハイデggerは、「非隠蔽性」あるいは「開け」としての真理のなかで、「存在者」が「人間」に「開いて現前」し、その「開け」のなかで、「人間」がそのつど「存在者」と関わりとするのだが、このことに関連して、彼は、「哲学の根本的問い」講義へ向けた「最初の構想」とされる「草稿」のなかで、以下のように述べている。例えば、われわれが「ある森の空き地」 (eine Waldlichtung) のような「開けた、明るい場所 (eine freie, helle Stelle)」に「存在者」があると言う場合のように、「存在者の開け」というのは「空き地 (明るみ)」 (die Lichtung) のことである。すなわち、「開け」あるいは「非隠蔽性」のうちで「存在者は、明るくされている (ist gelichtet)」のである。しかし、その「存在者」も、「われわれが明るみのうちにとどまりつつ、開けた存在者に完全に身を任せている、あるいは、存在者のとりこにさえなっている、まさにそのときに、一つの隠蔽されているもの (ein Verborgenes) によって取って代えられる」⁽⁶⁴⁾。ところが、われわれは「この存在者がそのつど、開けた場のうちに存在する」ということ、あるいは、「存在 (das Seyn) をもっている (haben)」⁽⁶⁵⁾ ということ、そのことにふれることは極めて稀である。また、われわれがこの「存在」を、いわば一つの「存在者」のようにして捉えようと試みても、「空

をつかむ」だけである。「存在は単純に隠蔽されているだけではなく、遁走し、隠れるのである」⁽⁶⁶⁾。したがって、「存在者が存在する明るみ（空き地）が限定され、限界づけられるのは、単純に一つの隠蔽されているものによってではなく、一つのみずからを隠蔽するもの（ein Sichverbergendes）によってである」⁽⁶⁷⁾。

こうして、ハイデッガーは、「哲学の根本的問い」の「最初の構想」のなかで、そのつどの「存在者」がそのつどその「明るみ」のなかに、すなわち「開け」のなかに現出するとき、その「明るみ」としての「開け」を成立させているのは、「みずからを隠蔽するもの」としての「存在」である、と主張する。しかし、ハイデッガーの主張はこれにとどまらない。ハイデッガーによれば、さらに、「明るみ」としての「開け」というのは、「みずからを隠蔽するもの」としての「存在」のためのものであり、「明るみが、みずからを隠蔽するもののため（für）にある」という「みずからを隠蔽するものこの規定は、存在自身（das Seyn selbst）の第一の本質的な特徴なのである」⁽⁶⁸⁾。

「存在者」は「開け」としての「明るみ」のなかで存在するが、「存在自身」は「みずからを隠蔽する」。しかし、「明るみ」は「みずからを隠蔽する存在自身のため」の「明るみ」である以上、「存在自身」の「自己隠蔽」（das Sichverbergen）というのとは、「存在自身」が「単に不在であること」（ein blosses Abwesendsein）を意味するのではない。それは、「存在自身」の、いわば「とまどいながらの拒否」（zögernde Versagung）であり、「とまどいながらの自己隠蔽」（das zögernde Sichverbergen）⁽⁶⁹⁾なのである。

このように、「明るみ」は「存在自身」の「自己隠蔽のため」の「明るみ」であり、「存在自身」の「自己隠蔽」も「ためらいながらの自己隠蔽」

なのであるが、しかし、「明るみ」というのは、同時に「存在者の明るみ」であり、「われわれ」は、この「明るみ」のなかに立ち現れてくる「存在者」に関わるのであった。したがって、「人間は、存在者の開けた場のなかで存在しつつ、同時に、みずからを隠蔽するものへと何らかの関係のなかにあり」、その意味において、「存在自身」の「自己隠蔽のための明るみ」は、「人間であることを担う根拠」（der tragende Grund für Menschsein）であって、ハイデッガーによれば、人間の「現-存在」の「現」（Da）が、まさしく、「人間であることを担う根拠」⁽⁷⁰⁾なのである。

「現-存在」としての「人間は、存在者のただ中で、存在に堪えている存在者であ」って、「存在の真理の守護者」（der Wahrer der Wahrheit des Seyns）であり、「存在の開けの番人」（der Wächter der Offenheit des Seyns）である⁽⁷¹⁾。「存在」は、そのような「守護者」あるいは「番人」としての「人間」に「現成する」のであるが、結局のところ、「真理への問いとは、存在の現成への問い（die Frage nach der Wesung des Seyns）への問いである」⁽⁷²⁾ことになる。

3-2-2 さて、「暴露性」であれ「露現性」であれ、『存在と時間』と『真理の本質について』で中心となっているのは、『存在と時間』の主要課題と関わる側面を考慮せずに言えば、「存在者の暴露性」あるいは「存在者の露現性」というように、「存在者の真理」であった。しかし、「哲学の根本的問い」講義では、ハイデッガーは、「暴露性」あるいは「露現性」、すなわち「非隠蔽性」そのものが「最も問うに値するもの」だとして、「存在者」の「非隠蔽性」の根拠を問い、「存在者」がそのつど「開け」あるいは「明るみ」のうちに立ち現れ、そのつどの「存在者」に対して「人間」が関わるのは、「隠蔽されるもの」としての「存在」による、とする。しかも、「隠

蔽されるもの」としての「存在」を隠蔽するのは、「存在自身」である、とするのである。したがって、「人間」が「存在者」と関わり合う「開け」あるいは「明るみ」というのは、同時に、「存在自身」が「自己隠蔽する」場でもあることになり、この点において、「哲学の根本的問い」講義の真理概念は、「両著作」のそれとは大きく異なっているのであるが、さらに、「両著作」の真理論と異なる点としては、「開け」あるいは「明るみ」を、人間の「現—存在」の「現」であるとして、「現—存在」は、「現」であるがゆえに、「存在の守護者」、「存在の番人」として、「存在の現成」をいわば見張る、とされていることである。では、「非真理」の概念に関してはどうか。ここでは、『真理の本質について』における「非—真理」の概念との比較にとどめておく。

『真理の本質について』では、「開けた場」に「露現する」のは、そのつど「開けた態度」に関わる個々の「存在者」であって、「存在者の全体」は露現されない。言い換えれば、「現存在」はそのつど「露現する」「存在者」に対してそのつど関わるのだが、そのとき「存在者の全体」は「隠蔽される」。この「存在者の全体」の「隠蔽性」あるいは「非露現性」が「非—真理」とされているのである。しかし、「哲学の根本的問い」講義では、「隠蔽される」のは、「存在者の全体」ではなく、「存在」であり、それも「存在自身」が「自己を隠蔽する」のである。ここでは、「非—真理」という言葉は見られないが、しかし、「隠れる」のは「存在」であり、「存在」が「自己を隠蔽する」がゆえに、「現—存在」としての人間は、「存在の現成」のための「守護者」あるいは「番人」となるのである。

最後に、『ヒューマニズムに関する書簡』の真理概念について簡単にふれて、本稿を閉じることにする。本書においてハイデッガーは、「現

存在」あるいは「脱自—存在」(Ek-sistenz)と「存在」あるいは「存在の真理」との関わりの中に「人間の本質」があるとして、「従来のヒューマニズム」の人間観とその基にある「形而上学」を批判するのだが、同時に、彼はここで、現在の立場と『存在と時間』を書いた当時の立場とは同じであり、自分の立場が終始一貫していることを示したかったようにも見える。というのも、『存在と時間』で示された重要な命題が頻繁に引用され、その真の意味はかくかくしかじかである、とそれらの命題に改めて説明が加えられているからである。本稿では、そのいくつかをとりあげて、『ヒューマニズムに関する書簡』の真理概念を見ることにする。

まず、『存在と時間』の「現存在の本質はその実存にある」という命題については、次のように説明する。それは、「人間が〈現〉である」ということ、「存在の明るみであるという仕方で現成する」ということ、そして、「この現の〈存在〉が脱自—存在という、すなわち、存在の真理のうちに脱自的に内存する (das ekstatische Innestehen) という特徴をもつ」ということを意味する⁽⁷³⁾、と。次に、「人間の实体は実存である」という命題についても、「人間の固有の本質が存在へと現前する仕方は、存在の真理のうちで脱自存在的に内存する」という意味であるとし⁽⁷⁴⁾、さらに、「現存在が存在する限りにおいてのみ、存在がある」という主張については、「存在の明るみが生起する限りにおいてのみ、存在は人間にみずからを委ねる」という意味であるが、しかし、「現、すなわち存在それ自身の真理としての明るみが生起するということは、存在それ自身の贈り (die Schickung des Seins selbst) である」⁽⁷⁵⁾、と述べるのである。

これらの説明によれば、人間の「現—存在」の「現」は「存在の明るみ」のことであり、人間の「現—存在」の「存在」のほうは、その「明

るみ」のうちに、すなわち「存在の真理」のうちに「脱自的に内存する」が、その「明るみ」そのものは、「存在の贈り」である、ということになる。しかし、「明るみ」そのもの、すなわち「存在の真理」が「存在の贈り」であり、人間が「明るみ」としての「真理」のうちに「脱自的に内存する」というとき、この『ヒューマニズムに関する書簡』では、主体は「現存在」としての人間ではなく、あくまでも「存在」のほうにある。ハイデッガーは言う。「むしろ、人間は存在それ自身によって存在の真理のうちへと被投されて (geworfen) いるのであって、そのように脱自的に一存在しつつ、存在の光 (das Licht des Seins) のなかで存在者がそれである存在者として現れるようにと、存在の真理を見張っているのである」⁽⁷⁶⁾、と。このように、人間は「存在の贈り」としての「存在の明るみ」、すなわち「存在の真理」のうちに、「存在それ自身」によって、「脱自一存在」として「被投されて」、「存在の真理を見張っている」のだが、ハイデッガーによれば、「脱自一存在」として「存在の真理」を見張りながら、それを「言葉」にもたらずのが、「思索」(das Denken) に他ならない。「存在は、みずからを明らめながら、言葉に到来する」⁽⁷⁷⁾。「この到来するものを、脱自的に一存在する思索は、みずからの語りのなかで言葉にもたらずのである」⁽⁷⁸⁾。

さて、『ヒューマニズムに関する書簡』における真理概念は、『真理の本質について』の終わりに書かれている「真理の本質は、本質の真理である」という言葉、また「哲学の根本的問い」講義における「真理への問いは、存在の現成への問いである」という言葉を具体化したものであるように見える。「本質の真理」と言うときの「本質」(das Wesen) は、「存在」を暗示しているようであり、また「存在の現成」と言うときの「現成」(die Wesung) は、「本質」

と密接に関連しているからである。しかし、『真理の本質について』の「本質の真理」が、「存在の真理」というものを暗示しているにしても、それは、暗示以上のものでも以下でもない。「哲学の根本的問い」講義については、「現存在」としての人間が、「存在の真理」の「守護者」あるいは「番人」として、「存在の現成」を見張るといことが言われており、その限りにおいては、『ヒューマニズムに関する書簡』の真理概念は、「哲学の根本的問い」講義のそれを発展させたものと見ることができる。しかし、「哲学の根本的問い」講義では、「存在」はあくまでも「自己を隠蔽する」のであって、「存在の現成」のための「守護者」、「番人」は存在しても、「脱自一存在」と「存在の明るみ」あるいは「存在の真理」との関わりについては、また、「存在」の声を「言葉にもたらず」「思索」については、何も語られていないのである。

(注)

引用文献については、以下のように略記する。

“Sein und Zeit” (M. HEIDEGGER GESAMTAUSGABE BAND2 VITTORIO KLOSTERMAN) : S. Z.

“Vom Wesen der Wahrheit” (M. HEIDEGGER GESAMTAUSGABE BAND9 WEGMARKEN) : W. M.

“Grundfragen der Philosophie” (M. HEIDEGGER GESAMTAUSGABE BAND45) : G. P.

“Über den Humanismus” M. HEIDEGGER GESAMTAUSGABE BAND9 WEGMARKEN) : W. M.

(1) vgl., S.Z. ; S. 284

(2) vgl., S.Z. ; S. 288

(3) ebenda

(4) ebenda

(5) S. Z. ; S289

- (6) ebnda
(7) vgl., S. Z. ; S. 291
(8) S. Z. ; S. 292
(9) ebenda
(10) ebenda
(11) S. Z. ; S. 293
(12) ebenda
(13) ebenda
(14) S. Z. ; S. 293-294
(15) S. Z. ; S. 294
(16) S. Z. ; S. 299
(17) S. Z. ; S. 300
(18) W. M. ; S. 180
(19) W. M. ; S. 183-184
(20) W. M. ; S. 184
(21) ebenda
(22) ebenda
(23) ebenda
(24) ebenda
(25) W. M. ; S. 185
(26) ebenda
(27) W. M. ; S. 186
(28) ebenda
(29) ebenda
(30) W. M. ; S. 188
(31) ebenda
(32) W. M. ; S. 189
(33) ebenda
(34) W. M. ; S. 190
(35) W. M. ; S. 193
(36) ebenda
(37) W. M. ; S. 194
(38) ebenda
(39) ebenda
(40) W. M. ; S. 195
(41) ebenda
(42) ebenda
(43) W. M. ; 196
(44) ebenda
(46) ebenda
(47) ebenda
(48) ebenda
(49) 「先駆的決意性」とは、「被投的企投」の「本来的全体性」のことであるが、ハイデッガーは、『ヒューマニズムに関する書簡』では、「被投的企投」を「脱自一存在」への「存在」の関わりとして捉えている。すなわち、「存在」が「脱自一存在」を「存在の真理」へと「企投」し、「脱自一存在」は「存在の真理」へと「被投される」としているのである。しかし、『存在と時間』における「被投的企投」というあり方は、「現存在」のそれでははなく、また、「先駆的決意性」は「実存」のそれではないと言わざるをえない。
(50) vgl., S. Z. ; S. 293
(51) この文章から見ても、『存在と時間』における真理概念は、「存在」そのものではなく、「存在了解」との関連のなかで見られているということができる。
(52) S. Z. ; S. 304
(53) S. Z. ; S. 294
(54) S. Z. ; S. 295
(55) vgl., W. M. ; S. 197
(56) W. M. ; S. 197
(57) 世界歴史の端緒において、「存在者の全体」が「ピュシス」として露現したにもかかわらず、すぐさま「存在者の全体」は「隠蔽されて」しまい、それが「秘密」として「人間の歴史」を支配するという視点。
(58) S. Z. ; S. 304
(59) W. M. ; S. 194
(60) W. M. ; S. 200
(61) G. P. ; S. 132

- (62) G. P. ; S. 169
- (63) ebenda
- (64) G. P. ; S. 210
- (65) ebenda
- (66) ebenda
- (67) ebenda
- (68) ebenda
- (69) ebenda
- (70) G. P. ; S. 212
- (71) G. P.; S. 214
- (72) G. P.; S. 217
- (73) W. M. ; S. 325
- (74) W. M. ; S. 330
- (75) W. M. ; S. 336
- (76) W. M. ; S. 330
- (77) W. M. ; S. 361
- (78) W. M. ; S. 362